



## パルスと音高 ～音楽体験に深みを～

敢えて作曲とは申し上げませんが、音を配置した作品です。ピアノロールの映像と共にある事で、あるコンセプトが伝わるような作品になっており、主眼は2つあります。一つは普段リズムとして捉えている要素と、音高として捉えている要素とは現象として連続的な側面があるという点。もう一つは、たとえ音楽作品だとして音を主役とする作品においても、視覚的な要素がその本質をいくらか担うことは可能である、というメタ的発想に基づくものです（そもそも楽譜というものの存在意義にも通づる発想であると考えています）。

### 理論

まず、リズム（パルス）と音高について考えてみましょう。例えば人が手を1秒間に4回叩く、という指示は楽譜においては60BPMにおいて連続する16分音符として表記されます。一方で、楽器でラ（A = 442Hz）の音を出すためには楽譜上で所定の「位置」に音符を配置することになるでしょう。

ここで、実験的にですが、前者の手拍子について、 $60 \times 110 = 6600$ BPMの譜面で16分音符を叩く指示があったと考えてみましょう。これは換算すれば440Hzで手を叩くことであり、結果的に人の耳にはそのパルスは音高として知覚されます。（もちろん、双方が同じに聞こえないのは、倍音構成にあげられるようなスペクトル比やその他の要素が絡んできます。）手拍子をここまで高速にすることこそ現実的ではありませんが、蚊や蜂の羽音が音の高さとして知覚できることは、身近な例として理解していただけたと思います。

そうして音高とリズムとの関係が曖昧になる状態が存在する訳ですが、その状態を実感してもらうための作品として、ピアノロールを添えた作品を作成しました。

曲としての耳障りは良くないかもしれませんが、このように制作の意図が少しわかると、鑑賞が面白くなってくるかもしれません。鑑賞する側によって作品の受容・解釈・評価が行われた時、その体験的契機こそが芸術を完成させるとする立場をとるアーティストも現代のアートには多く見られると考えられます[1]

#### 参考文献

[1] Marcel Duchamp(1994) Creative Act. Recorded by Sub Rosa – SR57.